



= いまの憲法が私たちの暮らしを守る =

”自助を求める政治”が

「国民のために働く内閣」の目的ですか？

新型コロナウイルスの感染が治まらない中で、安倍政治の継承をうたった菅内閣ができました。菅首相は自助、共助、公助そして絆に基づいて国民のための政治を行うと発表しました。

そして新内閣はかつてない高い支持を集めていることが各報道機関等の調査からわかりました。国民が、多くの問題の解決を求めて期待する声の大きいこと、表れです。安倍政治の終盤、支持率がどん底だったことを考えれば何とかしてくださいという国民の切実な思いの現れだと考えても間違いではないでしょう。国民は「桜を見る会」の招待者と安倍前首相の関係など、明確な調査を強く求めている事は回答からもあきらかです。雇用が増えたというアベノミクスも結果は大量の不安定な雇用、非正規労働者が生み出されたというところにほかなりません。そしてこのコロナ禍が多くの失

業、生活困窮の原因となっています。安倍政治が生み出した人災とも言えるものでしょう。であるに関わらずこの状況を解決するためにも自助努力をしると言われなくても無理な話だというほかにありません。言うまでもなく自助とは自ら努力して解決する事です。職を失い、住まいを失い、住所も失ってどう解決出来ますか。菅内閣はこの状況の国民にとにかく努力しろというのですか。それからでないかと救済はしませんというのですか。私たちは生きなければなりません。命の糧を得るお金はどうしても必要です。職を失うと同時に食も失うということでは当然ですが生きていけません。こんな場合、政治が職を失わないように、手立てを考える、職を失っても食は失わない制度を作っておく。職を失うから、自助努力で何とかするのでなく、職を失うことが無いように

する。万が一失ったら次の職が確保できるまで保障を行う。このような保障があつてこそ自助努力も出来ることになるのではないのでしょうか。自助、共助、公助は順番ではないのです。自助を行うために公助のシステムが必要であり、それを準備するのが政治の役割です。国民の大きな期待を集める新内閣といわれるのであれば政治の基礎をここに置いてもらいたいと思います。

= 市役所ふれあいギャラリーでの展示会 =

今年 は 平和のつとめ13年のあゆみ

主催 平和のための戦争展・のだ実行委員会

10月8日(木)～13日(火) 9:00～17:00(最終日は15:00終了)

野田市役所 ふれあいギャラリー



平和のつとめ13年のあゆみと
ペシャワール会の今の写真や沖縄の現状、
原爆パネルなど。現憲法の基本も学べます。

今月の予定です

_ 皆さん 気軽に参加ください _



この九条通信をポストインできる方にご希望数をお渡しします。ご連絡をお待ちしております。

10月9日(金) 16:00～17:00

9の日
行動

九条通信配布・ボードでアピール

梅郷駅 通路

野田・九条の会

10月10日(土) 13:30～17:00

野田・九条の会
9月例会

DVD視聴「番地のなかった街で」と意見交換

櫻のホール 集会室 第1

野田・九条の会

10月11日(日) 13:30～16:40

DVD視聴と
意見交換

”i新聞記者ドキュメント”

南部梅郷公民館

南地域九条の会

10月19日(月) 16:00～17:00

9の日
行動

九条通信配布・ボードでアピール

七光台駅 通路

野田・九条の会

10月29日(木) 16:00～17:00

9の日
行動

九条通信配布・ボードでアピール

川間駅 北口 野田・九条の会 雨天中止

主権者 国民は見ている！ 大手マスコミ政治部記者は政権と一体ではないか

8月9日といえば長崎原爆の日。75年目を迎え、安倍首相は現地で記者団の質問に応じた。まずこちらの写真をご覧ください。



この一枚は記者会見が終了する直前の一瞬を捉えている。安倍首相が記者からの質問の回答を終え、手元の書類をトントンと揃えて立ち上がるころだが、この書類をよく見ると上段囲みの小文字部分は問とあり、下は答との大文字が読みとれる。

安倍首相が会見でプロンプターを使い原稿を朗読しているのはすでによく知られたことだが、今回は使わず記者の質問と首相の答とが併記された原稿を読んでいた。普段の会見は高い壇上で行き手元は写らない。座って低い位置のときは前面に今回のように生花を置けば原稿は隠れる。しかし一瞬とはいえ不用意に原稿を立ててしまったので記者との関係を自ら国民に晒してしまった。



◆ ◆ ◆
もう一枚を見てみよう。コロナ対策で間を開けた会場の奥中央に首相、手前には記者がいるが中央の二人は何故かテーブルクロスが掛かった席にいる。左側は毎日新聞の女性記者、右は読売新聞の男性記者で二人が質問し、17分間のみで会見を終わらせている。他の記者は受けつけられず二人に決められていて、明らかに原稿を読み上げ質問し、安倍首相は既に質問が記された問答原稿の答の部分を読み上げそそくさと退場している。何故このようなセレモニーを国民は見せ付けられなければならないのか。この二枚は一瞬を捉えているためまずほとんどの国民は気付くことができなかつたと思われる。是非YouTubeで再確認いただきたい。ハッキリしていることは、大手マスコミ政治部記者は政権との緊張関係を無くし、権力の監視を怠り取り込まれ、もたれ合っている。質問しても再質問をせず、不都合な問いを封殺する姿は戦中の翼賛状態に回帰しつつあるのではないか。菅政権との間にもこの引継がれる姿を見ることになるのか。民主主義国の権力と報道の関係をどうあるべきか考えよう。



8月28日

安倍首相辞意表明に寄せて

柳 耕平

「安倍政治は限界に至っていた」と言う人々がいる。本丸(改憲)を除いてほぼ外堀は埋め尽くしたのだからもはや出来る事もあるまい。その意味に於いては確かに限界であったろう。ややシニカルだが慧眼である。防衛庁の省への昇格、日本版NSC発足、安保関連法、敵基地攻撃能力談話等、九条への的確な攻撃の例は枚挙に暇がない。第一次政権から、足掛け14年の、これが彼のレガシー(成果・遺産)である。我々は夢を見ているのではない。一方で護憲派たる我らの政治空間に於ける具体的成果とは何だったか。改憲発議の阻止、強

制力を持った遺産は只のこれだけである。しかもそれは危うい。厳しい言いようであるが実に惨めで恥ずべき醜態であろう。要するに我々は勝逃げされたのである。その事への深刻な反省と具体的対策なしには何度でも同じ事が繰り返されるだろう。現に世間は「安倍さん、お疲れ様」「(志半ばで)可哀そう」の大合唱である。この情緒は愚かで痛ましい。高く遠く飛ぶにはより長い助走が必要であるならばこの14年がその為の期間であったのだと、退任が追い詰められた末のものであったのだと明快かつ朗らかに言える日が来る事を願う。